



土壌分析をする実習生

北海道鵜川高等学校のデュアルシステムに協力しているJAむかわで、同校の山戸雅博さん(1年)と中川修さん(2年)が職場体験を行っている。

この新教育システムは、高校生の実践力の向上と勤労観、職業観の育成を目的に、学校の座学と企業での実習を組み合わせて行うもの。

二人が実習先にJAを選んだ理由は、いろいろな職種があり、関心があったからだと言う。10月28日は農業振興部農業振興課の貞廣幸治課長の指導の下で土壌分析。貞廣課長は「作物を正常に育てるためには、土の健康状態や作る作物に土壌が合っ

ている量はどのくらいかを調整し、他の成分とのバランスも考えなければなりません。そのために土壌の不足する養分と、過剰な養分を把握する『土壌診断』が必要」と説明。

二人は組合員が持ち込んだ土を分析する作業を開始。検査項目は「苦土」「リン酸」「加里」「石灰」の4種類と基本項目のPH(土壌中の水素イオン濃度を示す値)とEC(電気伝導度)。薬品を入れて検査する時、それぞれタイムリミットがあり、時間内に作業処理しなければならない。1日の検査数は150点が限度で年に3回、800点~900点の分析を行っている。

鵜川高校デュアルシステムに協力

JAむかわで職場体験 鵜川高校の二人が奮闘中

いるのか、何が足りないかを見極めることが大切。作物が求め

中川実習生は「とても勉強になります。今後もJAのいろんな職場に行くので楽しみです」と話した。山戸実習生は「どの職場でもJAの人たちに優しく親切にしてもらい、楽しく学ぶことができました」と話した。

農業振興部の西内敬宣部長は「実習生は明るく、真面目な中にもユーモアがあり前向きに頑張り、仕事をしてもらいました。これからも積極的に生徒を受け入れ、JAや農業のことを理解してもらえれば嬉しい」とした。

鵜川高校は「デュアルシステムを通して職業体験をすることで、仕事の意義やそれぞれの組織や団体への理解を深めることを目標にしている」と感謝。二人は今後も金融部や総務部で、JAのさまざまな仕事の実習が計画されている。